

令和元年度
資料第2号

第57回(令和元年度)

北海道優良米生産出荷共励会審査概要報告書

令和2年3月

一般社団法人 北海道米麦改良協会

は じ め に

北海道優良米生産出荷共励会は、本年度で第57回となり、この間関係の皆様には多大なるご支援、ご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

令和元年は、春作業が順調に進むとともに育苗・移植も順調でした。初期生育が良好で、莖数も順調に確保できましたが、7月の日照不足および早期異常出穂等で穂揃い期間が長引いたことや、登熟期間後半の多雨・日照不足等の影響で後半の登熟が緩慢となったため、成熟期・収穫期は平年並みとなりました。また、7月の日照不足により籾殻サイズが小さくなり、千粒重が平年比97%に留まり、生産現場では公表（作況指数104）ほどの豊作感はないようです。

一方、日本穀物検定協会の米の食味ランキングでは「ゆめぴりか」「ななつほし」「ふっくりんこ」の3品種が特Aに評価され、特に、「ふっくりんこ」は2年ぶりの特A返り咲きとなりました。道内食率については、前年度より1ポイント下がりましたが86%と高い食率を維持しています。引き続き北海道米の評価向上に向け、さらなる生産技術の向上を図り、継続した良質・良食味米の安定生産に努めることが重要です。

さて、本年度の共励会については、移植栽培の個人および生産グループの部、並びに直播栽培の個人の部の合計3部門計8件の参加出展を頂き、これらについて1月22日に審査委員会を開催し、部門毎の賞を選考し、1月29日および2月5日に現地調査を行い、各賞を正式に決定致しました。

ここに第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会の審査概要および最優秀賞受賞の方々の米作りと経営についてご報告しますので、令和2年産以降の良質・良食味米安定生産の参考にご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本共励会の実施に当たり多大なるご協力を頂いた関係各位に対しまして、改めてこちらからお礼申し上げます。

令和2年3月

一般社団法人 北海道米麦改良協会

目 次

1. 第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会実施要領	1	
2. 第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準	3	
3. 第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査委員会委員名簿	7	
4. 第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査報告	8	
5. 第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会受賞者名簿	11	
6. 第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会最優秀賞受賞者現地報告		
移植栽培部門 個人の部	最優秀賞	12
移植栽培部門 生産グループの部	最優秀賞	16
直播栽培部門 個人の部	最優秀賞	21

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会実施要領

1. 目 的

高い生産技術により良質・良食味米の出荷実績を挙げており他の範となる生産者を表彰し、その取組みを関係者に広く周知することにより、北海道米の食味・品質向上により商品性を高めるとともに、稲作の経営の安定に資する目的で実施する。

2. 主 催 一般社団法人 北海道米麦改良協会

3. 後 援 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 北海道、地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会 北海道農産物集荷協同組合

4. 参加資格および手続き

(1) 道内で水稻を作付けする個人・生産グループ・法人（原則として北海道の優良品種を全面積作付けしていること）を対象とする。

但し、過去3カ年以内の最優秀賞受賞者は同じ栽培部門（「移植栽培部門」個人の部、同生産グループの部、「直播栽培部門」個人の部、同生産グループの部）の参加資格を有しない。

(2) この共励会への参加は、市町村米麦改良協会が農業改良普及センター所長（又は支所長）と協議の上推薦したものを、地区米麦改良協会において選考し推薦する。

① 「移植栽培部門」：個人の部

うるち米、もち米別とする。

作付面積（3カ年平均）はそれぞれ次のとおりとする。

○うるち米 2.0ha以上

○もち米 2.0ha以上

② 「移植栽培部門」：生産グループの部

栽培技術の取組みが一致性を有し、圃場管理技術等においても、省力化や品質向上に向けて共同で効率化を図っている生産グループ・法人であること。

うるち米、もち米別とする。

作付面積（3カ年平均）はそれぞれ次のとおりとする。

○うるち米 20.0ha以上

○もち米 10.0ha以上

③ 「直播栽培部門」：個人の部

うるち米のみとする。

直播栽培の作付面積（3カ年平均）は1.0ha以上とする。

○うるち米 1.0ha以上

④ 「直播栽培部門」：生産グループの部

栽培技術の取組みが一致性を有し、圃場管理技術等においても、省力化や品質向上に向けて共同で効率化を図っている生産グループ・法人であること。

うるち米のみとする。

直播栽培の作付面積（3カ年平均）は10.0ha以上とする。

○うるち米 10.0ha以上

- (3) 地区米麦改良協会からの推薦調書による応募期限は、令和元年12月20日（金）とする。
推薦調書には、令和元年産の「栽培履歴」を必ず添付する。
- (4) 大型施設を利用した生産者については施設の最終出荷実績を用いる。

5. 共励項目

【個人の部・生産グループの部共通】

- (1) 土づくり並びに施肥、栽培管理等
- (2) 収量並びに収量の安定度
- (3) 出荷成績（1等米・高品質米の出荷）
- (4) クリーン農業等の取組み（特別栽培米・Yes! clean米等の取組み）
- (5) 病害虫防除の取組み
- (6) 経営の観点からの評価（低コスト生産への取組み等）

【個人の部】

- (7) 良質米生産のための取組み（品質向上への技術的特徴等）

【生産グループの部】

- (8) 生産グループしての統一性、目標達成に向けた取組み

6. 審査

審査は、別に定める審査基準により行うものとする。

7. 審査委員会

この共励会には審査委員会を設け、審査にあたる。

審査委員は一般社団法人北海道米麦改良協会会長理事が委嘱し、審査委員長は審査委員会で互選する。

8. 表彰

審査の結果、その成績が優秀と認めたものを表彰する。

委員長が必要と認めた時は、他の機関および団体の表彰を受けることができる。

9. 調書の個人情報について

推薦調書に記載・提出された個人情報は、入賞通知・賞品などの送付の他、本共励会の運営、および一般社団法人北海道米麦改良協会の事業運営のために、必要な範囲で使用する。また、このため業務委託会社等に情報を開示する場合がある。

入賞発表、審査概要報告書、会報、ホームページ等で優良事例として生産者の氏名他推薦調書の内容を広報する場合がある。

推薦調書の個人情報の取扱いは、当該生産者(集団にあっては集団の長)の承諾を得て取り進める。

個人情報については、一般社団法人北海道米麦改良協会が定める「個人情報保護基本方針」に基づき取り扱う。

10. その他

本要領に定めるものの他、必要な事項は、一般社団法人北海道米麦改良協会会長理事が別に定める。

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準 「移植栽培部門」

1. 北海道優良米生産出荷共励会における「移植栽培部門」の審査は、この基準に定めるところによる。
2. 審査は、推薦調書についての審査を主体とし、成績の特に優秀なものについては、その成績をおさめた技術的要因について現地調査を行うものとする。
3. 審査対象期間は、平成29年から令和元年までの3ヵ年とする。
4. それぞれの水稲作付面積（3ヵ年）の基準は次のとおりとする。
 - (1) 個人の部
 - 第1部うるち米 2.0ha以上
 - 第2部もち米 2.0ha以上
 - (2) 生産グループの部
 - 第1部うるち米 20.0ha以上
 - 第2部もち米 10.0ha以上
5. 審査は、次の審査項目毎に3ヵ年の成績を基準として採点する。但し、冷凍米飯などの業務用途米等の低蛋白米ニーズの無い品種や特殊な栽培の技術、収量、品質等の成績は除く。
 - (1) 土づくり並びに施肥、栽培管理等 51点
 - ア. 透排水性改善 (15点)
溝切り、心土破碎、融雪促進、稲わら処理等表面水排除のための営農努力について採点する。
(但し、稲わら春鋤込みは減点対象とする。)
 - イ. 施肥量、施肥方法並びにケイ酸質資材等土壌改良資材の施用 (9点)
北海道施肥標準量（北海道施肥ガイド2015）を目安として採点する。
 - ウ. 堆厩肥、稲わら等の有機物施用 (9点)
10a当たり500kg以上の堆厩肥施用を基準に採点する。
 - エ. 移植時期、栽植密度 (12点)
各育苗形式毎の栽培基準に基づいて採点する。
 - オ. 乾燥方法 (6点)
二段乾燥実施の有無により採点する。
 - (2) 収量並びに収量の安定度 20点
作付する上位3品種が地帯別作付指標に合致し、かつ95%以上の作付率であることを原則とする。
 - ア. 収量 (10点)
3ヵ年平均の10a当たり収量について、農政事務所の当該市町村の10a当たり平年収量を当該市町村の地帯別ふるい目幅別重量分布状況の数値で補正した値と比較して採点する。
 - イ. 収量の安定度 (10点)
10a当たり収量の3年間の変動係数に基づき採点する。
 - (3) 出荷成績 20点
 - うるち米
 - ア. 低たんぱく米出荷率 (15点)
精米たんぱく質含有率6.8%以下の出荷比率について採点する。
該当品種はゆめぴりか、ふっくりんこ、おぼろづき、ななつぼし、ほしのゆめ、きたくりんとする。

ただし、「ゆめぴりか」は7.4%以下、「おぼろづき」は7.9%以下の出荷比率とする。

- イ. 1等米出荷率 (5点)
1等米の出荷率について採点する。

○もち米

- 1等米出荷率 (20点)
1等米の出荷率について採点する。

- (4) クリーン農業等の取組み 6点
特別栽培米・YES! clean米、有機JAS、環境保全型農業の取組面積に応じて採点する。

- (5) 病虫害防除の取組み 6点
発生対応型防除の励行などの確な病虫害防除の実施状況に応じて採点する。

- (6) 経営の観点 7点
(低コスト生産の実践度など)からの評価について採点する。

- (7) 個人の部については、良質米生産についての意識と目的達成のための努力について採点する。
10点

- (8) 生産グループの部については、生産グループとしての取組み(グループとしてのまとまり、
目標達成に向けた取組み)状況について採点する。 10点

6. 順位の決定は、上記の各部門毎に各審査項目の合計点(両部とも120点、小数点第2位以下を四捨五入)に基づき、審査委員会において決定する。

以上

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準 「直播栽培部門」

1. 北海道優良米生産出荷共励会における「直播栽培部門」の審査は、この基準に定めるところによる。
2. 審査は、推薦調書についての審査を主体とし、成績の特に優秀なものについては、その成績をおさめた技術的要因について現地調査を行うものとする。
なお、審査対象は「うるち米」のみとする。
3. 審査対象期間は、平成29年から令和元年までの3ヵ年とする。
4. それぞれの直播作付面積（3ヵ年平均）の基準は次のとおりとする。
 - (1) 個人の部（うるち米） 1.0ha以上
 - (2) 生産グループの部（うるち米） 10.0ha以上
5. 審査は、次の審査項目毎に3ヵ年の成績を基準として採点する。

(1) 基本技術	41点
ア. 融雪促進、	
土作り（透排水性改善、稲わら処理、土壤改良資材・有機物施用）	(9点)
施肥	(6点)
施肥量（基肥・追肥）	
北海道施肥標準量（北海道施肥ガイド2015）を目安として採点する。	
イ. 湛水直播・乾田直播別技術	(8点)
湛水直播：出芽促進技術	
【種子予措（吸水・催芽・カルパーコーティング）・落水期間】	((2点×3)
均平施工	(1点)
直播と移植のローテーション	(1点)
乾田直播：田畑輪換	((1点×3)
均平施工	(2点)
漏水対策	(2点)
種子予措	(1点)
ウ. 播種期、播種量	(6点)
播種期、播種量の目安に基づいて採点する。	
エ. 除草剤の適正使用	(6点)
剤の選択・処理時期・合計処理回数	
オ. 乾燥方法	(6点)
二段乾燥実施の有無により採点する。	
(2) 収量並びに収量の安定度	28点
ア. 収量	(16点)
3ヵ年平均の10a当たり収量について、農政事務所の当該市町村の10a当たり平年収量を当該市町村の地帯別ふるい目幅別重量分布状況の数値で補正した値と比較して採点する。	
イ. 収量の安定度	(12点)
10a当たり収量の3年間の変動係数に基づき採点する。	
(3) 出荷成績	8点
1等米出荷率（1等米の出荷率について採点する。）	

- (4) 病害虫防除の取組み 6点
発生対応型防除の励行などの確な病害虫防除の実施状況に応じて採点する。
- (5) 直播栽培に当たって創意工夫のある取組みについて採点する。 10点
(低たんぱく米生産の取組み等も含む)
- (6) 直播栽培に係わる経営の観点からの評価について採点する。 7点

6. 順位の決定は、上記の各部門毎に各審査項目の合計点（両部とも100点、小数点第2位以下を四捨五入）に基づき、審査委員会において決定する。

以上

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査委員会 委員名簿

	所 属	役 職 名	氏 名
委員長	北海道 農政部	生産振興局 技術普及課 上席普及指導員	藤田 雅久
委 員	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター	作物開発研究領域長	川口健太郎
委 員	北海道 農政部	生産振興局 技術普及課 主査	石岡 康彦
委 員	地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 中央農業試験場	生産研究部 水田農業グループ 研究主幹	後藤 英次
委 員	北海道農産物集荷協同組合	業務課 課長	加葉田和志
委 員	北海道農業協同組合中央会	農政対策部 米穀農産課長	平野 茂貴
委 員	ホクレン農業協同組合連合会	米穀総合課 課長	佐藤 直樹

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会審査報告

一般社団法人北海道米麦改良協会主催の第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会の審査委員を代表して審査の概要を次の通り報告します。

1 令和元年の気象経過と水稻の作柄

令和元年は、融雪が早く春作業が順調に進むとともに、苗も概ね平年並で、移植作業も順調でした。移植後も好天が続いたため活着が早く初期生育は良好で、分けつが順調に増え、7月1日現在の茎数は平年比117%と多くなり、幼穂形成期も全道平均で4日早まりました。幼穂形成期以降は日照不足となりましたが、冷害危険期の気温が平年並みに推移したため、稔実障害は回避されました。7月6半旬～8月1半旬は高温・多照で、出穂・開花は順調でしたが、遅発分けつが有効化したため、全般に穂揃い期間は長引きました。登熟は前半が高温傾向で順調でしたが、その後、多雨・日照不足となり、やや緩慢となりました。成熟期・収穫作業は平年並でした。

農政事務所公表の作況指数は104（やや良）でしたが、籾殻の大きさが決まる冷害危険期前後の日照不足の影響で、籾殻が小さくなった結果、千粒重が平年比97%に留まったため、生産現場では公表ほどの豊作感はないようです。

精米タンパク質含有率は全道的にやや高めでした。本年の土壤窒素の推移を見ると、春先の高温・多照により、土壤窒素の無機化が早まるとともに、その後も高いレベルで推移したため、稲体は継続的に土壤中の窒素を吸収していたと推測され、低タンパク米の出荷割合が低下したと考えられます。

2. 審査結果

本年は移植栽培では個人および生産グループの部さらに直播栽培では個人の部の合計3部門計8件の出展がありました。各地区米麦改良協会がJA、地区農業改良普及センターと協議して提出いただいた推薦調書に基づき、平成29年～令和元年の3年間の出荷実績や栽培管理について審査、採点をいたしました。

次に最優秀賞受賞者を中心に、具体的な技術内容等についてご紹介いたします。

1) 移植栽培の部 最優秀賞受賞者

(1) 個人の部 うるち米：2ha以上 辻田恵一氏（新函館農協・知内町）

辻田恵一さんは、80歳のご高齢ですが、経営を娘さんに引き継いでおり、更にお孫さんも後継者見習いとして手伝っています。

水稻の作付面積は9haで、土壤条件が褐色低地土、灰色低地土および泥炭土と多様ですが、どの圃場でも低タンパク米生産を目標に、長期計画による暗渠施工、土壤改良資材の施用、中干し、溝切りおよび心土破碎等で圃場の透排水性の向上と土づくりに努めています。泥炭土でも低タンパク米生産が可能であったため、作付け品種を全面「ふっくりんこ」に切り替えました。

健苗育成を基本として緑苗を作らない工夫、家族労働を軸にして経費削減を図るためのGPS機能付き直進タイプの8条型田植機の導入、毎日早朝の圃場巡回および定期的な畦畔雑草の刈取り等の基本技術を励行して、身の丈に合った栽培技術を実践しています。

全道的に不作年であった平成30年にも低タンパク米を100%出荷して、「ふっくりんこ」の低タンパク米生産に寄与しています。

(2) 生産グループの部 うち米：20ha以上 美葉牛宮農組合

(代表 加葉田 研氏、きたそらち農協・北竜町)

美葉牛生産組合は昭和40年代後半に設立され、近年では10戸の生産者と1農業法人からなる生産組合で、代表の加葉田氏は法人の代表でもあります。耕地面積は法人が約150ha、他の生産者の合計が約220haで、うち水田面積は合計230ha程度です。令和元年度の作付品種は「ななつぼし」約50%、「ゆめぴりか」約40%で2品種で90%を超えています。水稲以外では大豆、そば、小麦、ひまわりを作付けしています。

冬期間の積雪が多く春の融雪が遅い地域で、土壌改良資材の施用、溝切・心土破碎および田畑輪換等で透排水性の改善に努めています。初期生育を確保するため施肥量の40%程度を側条施肥をとすることや、幼穂形成期後のケイ酸追肥を着実に実施して、収量が10俵/10aレベルでありながらも、営農組合全体で低タンパク米を54%程度(平成29年～令和元年の平均)出荷しています。

北竜町では本営農組合も含め、全稲作農家が「生産情報公表農産物の日本農林規格」を取得するとともに、慣行栽培の5割(11成分)以下の農薬節減米を生産し、ひまわりライスとして出荷しています。営農組合の一部の水田では、さらに農薬成分を減らして、高度クリーン米生産を目指す取り組みも進めています。

2) 直播栽培の部 最優秀賞受賞者

(1) 個人の部 1ha以上：齊藤秀樹氏(新函館農協・北斗市)

齊藤秀樹氏は平成13年に北斗市で初めて乾田直播栽培に取り組み、現在では13haの水稲作付面積のうち4haで「ななつぼし」「えみまる」の乾田直播栽培を行っています。田畑輪換を取り入れており、大豆作付2年の後、水稲乾田直播2年のローテーションを行っています。

齊藤氏は基本技術を励行しつつも、V溝播種機、均平機、ケンプリッジローラーを3戸で共同利用するなど、先駆的に新たな技術・農機等を取り入れてきました。また、「えみまる」の試験栽培も行っており、早生品種の直播栽培にも積極的です。道南地域では、「ななつぼし」の直播栽培が可能ですが、毎年「ななつぼし」の低タンパク米を出荷し、JAでのブランド米販売にも協力していることや、直播栽培の取組により、春先の労働競合の軽減と育苗ハウスの節減により、ハウストマトも栽培しています。

また、齊藤氏は早くからの直播栽培の取り組みにより、道南での水張面積維持に大きく貢献するとともに、「ふっくりんこ蔵部」の初代会長、農業委員ほか種々の役員を務め、地域の振興に大いに貢献してきました。

3) おわりに

最優秀賞受賞者以外では、移植栽培個人の部で旭川市の清水和之氏(あさひかわ農協)および赤平市の山田昌毅氏(たきかわ農協)が特別優秀賞を、北竜町の高畑克洋氏(きたそらち農協)および共和町の工藤勇樹氏(きょうわ農協)が優秀賞を、直播栽培個人の部で美唄市峰延町の加藤禎行氏(峰延農協)が特別優秀賞をそれぞれ受賞されました。5名の方々はそれぞれの技術で北海道米の収量・品質の高位安定化に寄与されています。

最後に受賞者に共通する技術的な項目について以下にまとめてみます。

融雪促進、溝堀りによる表面水の除去、心土破碎および稲わらの搬出による透排水性の改善対策、これらは全て乾田化を実現するための基本技術です。乾田化により土壌物理性が改善され透排水性が向上するとともに、乾土効果の発現による旺盛な初期生育が期待できます。これらは全て収量、品質、食味の高位安定化に結びつく重要な必要条件であるとともに、北海道米というブランドを維持するた

めに必須の基本技術です。もちろん、生育ステージごとの的確な栽培管理技術が重要なことは言うまでもありません。

審査対象の平成29年は豊作年でしたが、平成30年は不作年、令和元年も収量は平年並以上となりましたが、低タンパク米の出荷率は高くありませんでした。

出展者の中では有利販売を目的とした減農薬等による特別栽培米生産が目立ちましたが、最近では特別な取り組みではなくなってきたとの認識があるようです。

気象や生育が様々に変動した中で、各自が基本技術を忠実に実践した上で、技術の工夫を重ねて良質良食味米の安定生産に努力していました。その積み重ねによって収量と品質が安定し、北海道米全体の品質向上、評価を高める地道な推進力となっています。

終わりに本共励会に参加頂いた関係者各位の生産努力に心から敬意を表して審査報告といたします。

第57回（令和元年産）北海道優良米生産出荷共例会審査委員長
北海道農政部生産振興局技術普及課（上川農業試験場技術普及室）
上席普及指導員（農業革新支援専門員） 藤田雅久

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会 受賞者名簿

※敬称略

1. 移植栽培部門

【個人の部】

【うるち米 2ha以上】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	辻田 恵一	知内町	新函館
特別優秀賞	山田 昌毅	赤平市	たきかわ
特別優秀賞	清水 和之	旭川市神居	あさひかわ
優秀賞	工藤 勇樹	共和町	きょうわ
優秀賞	高畑 克洋	北竜町	きたそらち

【もち米 2ha以上】

【出展なし】

【生産グループの部】

【うるち米 20ha以上】

表彰名	生産グループ名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	美葉牛宮農組合	北竜町	きたそらち

【もち米 10ha以上】

【出展なし】

2. 直播栽培部門

【個人の部 うるち米 2ha以上】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	斉藤 秀樹	北斗市	新函館
特別優秀賞	加藤 禎行	美唄市峰延町	峰延

【生産グループの部 うるち米 20ha以上】

【出展なし】

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会最優秀賞受賞者現地報告

移植栽培部門 個人の部

[うるち米] 最 優 秀 賞

受賞者氏名 辻 田 恵 一
住 所 上磯郡知内町字重内
審査員（代理） 北海道農政部生産振興局技術普及課 道南農試駐在主任普及指導員 狩 野 康 弘

1 経営の概要 経営耕地面積 11.4ha
水稲作付面積 10.3ha

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3カ年の平均
水稲作付面積		8.3ha	8.4ha	10.3ha	9.0ha
		(8.4ha)	(8.4ha)	(10.3ha)	(9.0ha)

注) 加工用米、新規需要米、政府備蓄米を除く作付面積。()内はこれらを含む作付面積。

2 家族の就農状況

(令和元年12月20日現在)

本人・続柄	平成29年	平成30年	令和元年
本人	○	○	○
妻	○	○	○
娘	○	○	○
孫	○	○	○

3 立地条件と稲作の経歴

(1) 地勢・立地条件

知内町は渡島総合振興局管内の西部に位置し、北は木古内町、西は上ノ国町、南は福島町に隣接し、津軽海峡に面して重内平野が広がり、三方を山に囲まれ、町の中央を知内川が流れている。気候は暖流の流れる津軽海峡に面している為、比較的温暖な気候であるが、春先は日本海側の冷涼な風が千軒峠を下り流れ込んでくることもある。冬の気温は最低気温が氷点下10度を下回る事も少なく、降雪量は比較的少なくなっている。

水田土壌は褐色低地土、灰色低地土、グライ低地土、泥炭土が混在している。

知内町は、にら・ほうれんそう・トマトなどの施設園芸作物と水稲や畑作や酪農を組み合わせた複合経営が主体の地域となっている。特ににらは道内一の産地であり「北の華」のブランドで販売されている。

(2) 稲作の経歴

知内町の水稲耕地面積は約330haで、水稲作付農家戸数は約90戸となっている。

辻田氏は昭和34年から親元就農し、約5haの水田の作付けから始まった。水田は灰色

低地土が家の周りに多く、褐色低地土、グライ低地土、泥炭土といった複数の土壌型が混在している。「ふっくりんこ」は登場当時から作付けを開始し、ほ場を選んで作付けを行い、排水不良田などには「きらら397」を作付けしていたが、施肥量をほ場ごとに変更する事で、「ふっくりんこ」の低タンパク米の全量出荷を長く継続してきた。

4 稲作技術の特徴

(1) 透排水性改善とケイ酸資材の投入

褐色低地土から灰色低地土、泥炭土とさまざまな条件のほ場があるが、どのほ場でも共通して排水性向上を意識した土づくりに努めている。春先には溝切りで停滞水を排出し、ほ場の乾田化に努め、排水不良田には長期計画の中で暗渠施工を行い、可能な時には心土破碎も実施している。

ほ場の乾田化に向け、幼穂形成期前の中干し、出穂前の中干しなどを行い、落水後の水切れが良くなる様に努めている。収穫作業時には、急旋回などでほ場を深く掘らない様、作業効率性優先ではなく、ほ場を傷めない事を優先した作業に努めている。

ほ場の均平化にも気を配っているが、レベラーといった機械装備は持っていないため、機械作業で深くなったほ場内の滞水箇所には、耕起前に土を搬入して土を盛り、できる範囲内での水田の均平化に努めている。

ケイ酸資材は、低タンパク米の生産を継続するため、ほ場に必要量を土壌改良材として春に施用している。

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年
堆厩肥施用量kg/10a		—	—	—
土壌改良材kg/10a	資材名	ケイカル	ケイカル	ケイカル
	施用量	120kg	120kg	120kg
透排水性改善		溝切り	溝切り	溝切り

(備考) 溝切施工で、春の停滞水の排出を促している。

(2) 施肥量と施肥法

初期生育の確保を第一に考え、側条施肥を行っている。

施肥量は一例だが、ほ場に合わせた施肥を行い、収量性を確保しつつ低タンパク米の生産を目指した施肥量を設計している。

項目	年次	平成29年			平成30年			令和元年		
		N	P	K	N	P	K	N	P	K
施肥 (kg/10a)	全層	5.6	6.8	5.6	5.6	6.8	5.6	5.6	6.8	5.6
	表層									
	側条	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1
追肥	kg/10a									
	期日									

(3) 作付品種

泥炭土となる水田でも低タンパク米が生産できたことから、平成30年より全て「ふっくりんこ」を作付けすることにした。

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
作付面積	品種名	ふっくりんこ	7.6ha	8.4ha	10.3ha
		きらら397	0.7ha	0ha	0ha
	合計		8.3ha	8.4ha	10.3ha

(4) 育苗と移植

育苗管理は特に重要で、苗の節間をいかに短くし、揃った短い苗を作ることが大切だと考えている。

育苗ハウスでは、側面の裾に高さ50cmのビニールを2重に設置し、側面から30cm離して苗箱を配置している。シルバーポリ被覆は出芽し始めるとすぐ剥がし、たっぷり灌水させた後は、様子を見て3～4日は灌水せずに発根を促している。育苗土は自作した籾殻くん炭を混ぜて育苗土の水抜けを良くし、pHを調整して使用している。かん水は苗の様子を観察しながら水を与えすぎないようにし、早めのハウス開放を行い、草丈を伸ばさないよう努めている。ハウス側面と通路の苗箱は、育苗20日目頃に箱を180度回転させて、苗箱内の草丈が均一になる様に並べ直している。

移植時苗の草丈が10cm前後になる事と、初生葉が緑の状態で移植できる事を目標とし、胚乳消滅前から胚乳が消滅する育苗20日目と25日目に追肥する、栄養状態を意識した追肥を行っている。

移植作業は5/20頃から始め、悪天候であっても5月中に終わる移植計画を立てている。

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
育苗形式名			中苗マット	中苗マット	中苗マット
移植時期			5月20日～5月26日	5月21日～5月27日	5月22日～5月28日
栽植密度	畦幅 × 株間		33cm × 11cm	33cm × 11cm	33cm × 11cm
	m ² 当たり株数		27.5株/m ²	27.5株/m ²	27.5株/m ²

(5) 水管理

移植後の水管理は浅水とし、早期の分けつ促進を意識している。その後は、水深を5～10cmとなる様に管理し、入水は夜間または早朝に行い、遅くとも朝9時には入水を止め、水温の変化を少なくさせる水管理に努めている。

幼穂形成期は毎年の経験から、7月上旬より前歴期間の深水管理に移行し、冷害危険期にはできる限りの深水管理（畔の関係で10～15cm）を実施している。そして止葉が5cmほど出るタイミングを確認し、冷害危険期が終わったと判断して、中干しを実施している。

(6) 病虫害防除

病虫害を早期発見するため、毎日早朝には場巡回を行っている。畔の歩く場所を変えて、いろいろな角度から眺める事で、稲の変化を掴み、すぐに対処できるように心がけている。

畔草雑草は病虫害の温床となる事と、畔を歩くのが大変になるため、草刈りを定期的に

行い、雑草を伸ばさない様に努めている。

共同で行っているへり防除では、普及センターや農協の予察情報を基に日程を決め、適期防除に努めている。

5 特徴的な取り組みと産米出荷実績

初期生育の向上を第一に考えており、苗づくりに重点を置いている。苗の育苗期間は30日前後になる様に計画しており、移植期間は延びる前提で考えている。そのため、は種作業は2日おきに合計3回の1週間かけて行い、健苗移植するための作業計画を立てている。育苗期間中は苗を観察してかん水量を決定し、苗の状態を確認する事を心掛けている。

また、水田の排水性改善を大切にして、春先の乾田化による早期の土壌窒素供給を意識し、後半の窒素吸収が少なくなる稲づくりを目指している。

「特に変わった事はやっていない。基本的な事を大切にしてやっている。(辻田氏談)」という、基本技術を実践した栽培管理に取り組み、「ふっくりんこ」の全量低タンパク米の出荷を続けている。

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3カ年の合計
総出荷数量①		584俵	556俵	805俵	1,945俵
一等米数量②		584俵	556俵	805俵	1,945俵
一等米比率②/①		100%	100%	100%	100%
精米タンパク質含有率6.8%以下		584俵	556俵	805俵	1,945俵
精米タンパク質含有率6.8%以下出荷率		100%	100%	100%	100%

(執筆者：渡島農業改良普及センター本所 専門普及指導員 有田 匡志)

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会最優秀賞受賞者現地報告

移植栽培部門 生産グループの部

[うるち米] 最 優 秀 賞

受 賞 者 住所・代表者 北竜町美葉牛「美葉牛営農組合」
営農組合長 加葉田 研二

審 査 員 北海道農政部生産振興局技術普及課 上川農業試験場駐在
上席普及指導員 藤 田 雅 久

1 経営状況 耕地面積 373.04ha (注) 田・畑などの合計面積

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3カ年の平均
水稲作付面積		232.92ha	226.33ha	233.724ha	230.99ha
		(232.92)	(226.33)	(234.36)	(231.20)

(構成する生産者の合計面積)
注) 加工用米、新規需要米、政府備蓄米を除く作付面積。()内はこれらを含む作付面積。

2 構成生産者の状況

	平成29年	平成30年	令和元年
戸 数	12戸	11戸	11戸
従事者数	32人	30人	30人

3 立地条件と稲作の経緯

(1) 地勢・立地条件

北竜町は、空知の北部に位置し、やや海洋型といえる石狩地方と、やや内陸型といえる上川地方のほぼ中間に位置する。例年、延べ15m～18mの降雪がある多雪地帯である。基幹産業である農業は、雨竜川、恵岱別川、美葉牛川流域を中心として、肥沃な土地と豊かな水資源のもと高収量、高品質の稲作地帯として発展を遂げてきた。土質は、洪積層、沖積層より成っているが、大部分は沖積層である。洪積層は、丘陵部に分布して畑作地帯を形成しており、沖積層は、雨竜川流域の平坦部に分布して水稲地帯を形成している。

また、耕地面積の58%を占める水稲の他、そば22%、大豆7%、秋まき小麦4%の作付面積がある畑作物とメロン・スイカ・花卉などの園芸作物を取り入れた複合経営を行っている。

観光部門では、毎年道内外より25万人を越す観光客が「ひまわりの里」を訪れ、「ひまわり」にちなんで、「ひまわりライス」「ひまわりメロン」「ひまわりスイカ」「ひまわりそば」等、農産物はひとつのブランドとして販売展開を行っている。

美葉牛地区は町内でも最も留萌市寄りに位置し、2mを超える積雪深で融雪が遅いととも、60%以上が重粘土で占められ、透排水性の条件がよくない地域である。

4 稲作技術の特徴

平成18年より、全戸が農薬節減米の生産に取り組んでおり、使用農薬は11成分以下に抑え、種子消毒については平成24年より町内に導入された温湯消毒を活用し、0成分に抑えている。

「きたくりん」などのいもち病の耐病性品種も作付けし、4成分（慣行の80%カット）の低農薬栽培とそれに特別栽培米の施肥体系を合わせた「高度クリーン米」の栽培も取り入れ、「安全・安心」と「農薬費削減」の両面から農薬の選定を行っている。

(1) ほ場整備と透排水性改善

ア 作期中の透排水性改善として、「溝切りライダー」による溝切り、収穫後にはサブソイラーによる心土破碎を実施。積雪の早い年は厳しいが、それ以外では秋鋤き込みを行っている。耕起時には、細かく深度を確認して耕起深度の確保を行っている。

イ 融雪促進とケイ酸補給を兼ねて「粒状鉄ケイカル」や「とれ太郎P」などのケイ酸質資材を50~100kg/10aを散布している。また、3月中下旬頃、融雪促進のためにクローラートラクターを雪原に走らせ、雪割り作業等も行っている。

ウ 融雪後も土壤水分が下がるまで耕起はせず、作土が乾くまで待ってから、スタブルカルチなどで耕起を行い、ほ場の乾燥に努めている。

エ 小玉スイカやメロン等の施設園芸で生じる残渣を堆肥化し、2~3年に一度本田に散布している。

表1 融雪促進、土づくり等

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
堆厩肥施用量kg/10a			50kg	kg	kg
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	100%	100%	100%
		搬出	%	%	%
	当年産	秋鋤込	%	%	%
土壤改良材kg/10a	資材名		粒状ケイカル	とれ太郎P	とれ太郎P
	施用量		100kg	50kg	50kg
透排水性改善			サブソイラー/溝切	サブソイラー/溝切	サブソイラー/溝切

(2) 施肥量及び施肥法・ケイ酸質資材の追肥

ア 土壤診断に基づいて施肥窒素量を決め、初期生育の確保が難しいほ場では、側条割合を約40%程度まで引き上げることにより、対応している。また、ほ場毎の稲の生育状況を確認して施肥量の調節を行っている。

イ 幼穂形成期後のケイ酸追肥として、ラジコンヘリ用の液体珪酸「スタンドアップ」をケイ酸量換算で0.2kg/10a追肥している。散布時期は幼穂形成期後と出穂始の頃の2回。

表2 施肥量及び施肥法

項目		年次		平成29年			平成30年			令和元年		
		N	P	K	N	P	K	N	P	K		
基肥 (kg/10a)	全層	4.2	4.2	3.0	5.6	5.6	4.0	4.9	4.9	3.5		
	側条	4.0	1.8	0.6	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8		
追肥	kg/10a											

(3) 作付品種

「ななつぼし」「ゆめぴりか」の良食味米を中心に作付けを行っており、ここ数年では、「きたくりん」の低農薬栽培（農薬4成分以内）が増えつつあり、業務用米として「そらゆき」の栽培も行っている。また、多用途の目的で育種された高アミロース米「北瑞穂」の作付も始まっている。

表3 作付品種

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
作付面積	品種名	ななつぼし	133.89ha	132.22ha	122.33ha
		ゆめぴりか	90.56ha	80.52ha	94.15ha
		きたくりん	4.48ha	10.21ha	10.98ha
		そらゆき	3.33ha	2.39ha	4.94ha
		北瑞穂	0.33ha	0.42ha	0.334ha
	その他うるち	0.33ha	0.57ha	0.99ha	
	合計		232.92ha	226.33ha	233.724ha

(4) 育苗と移植

育苗様式は全戸成苗ポットで、管理については育苗期間の高温障害やそれに伴う早期異常出穂による収量・品質低下を防ぐために、「リスク回避のための目標葉数」にできるだけ近づけるようにしている。具体的には、育苗日数を30日程度に抑えることや「は種作業の期間」と「移植作業の期間」を同程度にするよう、スケジュールも組み方も見直し始めている。

表4 育苗と移植

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
育苗形式名			成苗ポット	成苗ポット	成苗ポット
移植時期			5月18日～5月24日	5月20日～5月26日	5月18日～5月24日
栽植密度	畦幅×株間		33cm×13.8cm	33cm×13.9cm	33cm×13.7cm
	m ² 当たり株数		22.0株/m ²	21.8株/m ²	22.1株/m ²

(5) 水管理

移植直後には、強風が吹くことが多いため、稲が隠れるくらいの水深で植え傷みを防ぐようにしている。融雪が遅く、稲わらも多く鋤込んでいるため、幼穂形成期前の中干しを可能な限り実施している。また、品種ごとの幼穂形成期の確認を行い、気象条件の良し悪しにかかわらず、深水管理を実施し、冷害危険期終了後もワキの多いほ場を中心に2回目の中干しを実施している。

(6) 病虫害防除・クリーン農業

ア 営農組合の全水稻面積の約40%をラジコンボートによる除草剤散布、無人ヘリによる計画的な病虫害一斉防除行い、適期防除による防除効果の向上と労働軽減を図っている。
 イ 防除のタイミングについては、生産組合を中心に予察員を任命し、地域の病虫害発生状況について「すくい取り」や「見歩き調査」を行い、情報集約後に即情報発信をする

- 事で、地域として周辺環境の整備、早期発見・適期防除に積極的に取り組んでいる。
- ウ 農協・普及センターと連携し、イネドロオイムシの巡回調査と発生予察を行い、防除のタイミング又は防除の必要性の判断を行っている。
 - エ 平成18年より、全戸が農薬節減米の生産に取り組んでおり、使用農薬は11成分以下に抑え、種子消毒については温湯消毒を活用し、0成分に抑えている。「きたくりん」などのいもち病の耐病性品種も作付けし、4成分（慣行の80%カット）の低農薬栽培とそれに特別栽培米の施肥体系を合わせた「高度クリーン米」の栽培も取り入れ、「安全・安心」と「農薬費削減」の両面から農薬の選定を行っている。

表5 クリーン農業等の取組状況

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3カ年の合計
有機JAS・特裁米・高度クリーン米取組面積		1.71ha	1.71ha	1.71ha	5.13ha
農薬節減米の取組面積 (慣行の5割以下)		222.70ha	201.07ha	219.08ha	642.85ha

5 産米出荷実績

7月前半の高温・多照と出穂期前後の多照によって多収となり低タンパク米が多かった平成29年、7月上旬と8月下旬の低温・寡照により収量・品質とも平年を下回った平成30年と、全道的な米の作柄の傾向と、北竜町も同様の傾向であった。しかし、その中でも美葉牛地区の出荷実績では、平成29年は蛋白質含有率6.8%以下が9割近くを占め、平成30年で22%、令和元年で46%と北空知エリアの中でも高い割合となっている。これが、「ゆめぴりか」の7.4%以下の基準品の割合となると、平成29年は100%、平成30年は57%、令和元年で92%という更に高い値を示す結果となっている。また、3年間を通して1等米の割合がほぼ100%となっている。

表6 産米出荷成績

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3カ年の合計
総出荷数量①		23,303.4俵	19,012.1俵	22,954.8俵	65,270.3俵
一等米数量②		23,303.4俵	19,012.1俵	22,937.8俵	65,253.3俵
一等米比率②/①		100%	100%	99.93%	99.97%
出高 荷品 数質 量米	精米タンパク質含有率6.8%以下仕分対象品種出荷数量	22,941.5俵	18,736.8俵	22,370.8俵	64,049.1俵
	精米タンパク質含有率6.8%以下	20,270.7俵	4,174.7俵	10,388.6俵	34,834.0俵
	精米タンパク質含有率6.8%以下出荷率	88.36%	22.28%	46.44%	54.39%
	合計	20,270.7俵	4,174.7俵	10,388.6俵	34,834.0俵

6 特徴的な取組み

(1) 各種調査の実施

生産実績をまとめる為の不稔調査等は生産組合で行い、収量構成要素・決定要素の確認を自分達の手で行っている。また、年次別の品質向上度合いを算出し、生産組合内で優良品質米の出荷共励会を行っている。

(2) 病虫害防除の予察員の育成

限られた農薬散布回数を遵守し、基準内のクリーン米を出荷するために、病虫害の防除予察員を設置していることを上述したが、予察員に対して、JAと普及センターが協力して、予察員研修会を開催し、いもち病の見歩き調査やブラスタムの活用法、カメムシのすくい取りの実演や多発地帯の見分け方など研修している。これにより予察員の育成と予察の精度を高め、情報を各集落ごとに共有して、対策を講じている。

(執筆者：空知農業改良普及センター北空知支所

地域第3係 専門主任 小 柴 潤 一)

第57回（令和元年度）北海道優良米生産出荷共励会最優秀賞受賞者現地報告

直播栽培部門 個人の部

[うるち米] 最 優 秀 賞

受賞者氏名 齊藤 秀樹
住 所 北斗市市開発
審査員（代理） 北海道農政部生産振興局技術普及課 道南農試駐在
主任普及指導員 狩 野 康 弘

1 経営状況 耕地面積 21.21ha（令和元年）（注）田畑などの合計面積

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3カ年の平均
水稲作付面積		13.0ha (9.0ha)	13.0ha (9.0ha)	13.0ha (9.0ha)	13.0ha (9.0ha)

注) 移植栽培を含む、水稲作付全面積。()は直播栽培面積。

2 家族の就業状況

(令和元年12月20日現在)

本人・続柄	年齢	性別	平成29年	平成30年	令和元年
本人	69	男	○	○	○
妻	70	女	○	○	○
(備考)					

3 立地条件と稲作の経緯

北斗市は函館平野の中央部に位置し、道内の中でも春の雪解けが早く、土壤凍結もないため、農耕に適した期間が長く、水稲と野菜の複合経営が主体の農業が展開されている。

北海道水田発祥の地として知られており、道南圏で順調に販売されている「ふっくりんこ」や「直播 ななつぼし」を中心に広域ブランド高品質米「函館育ち」の多様な流通・販売活動を展開し、地産地消が積極的に行われている。

稲作の高齢化・担い手不足が深刻化する中、収益性向上、労働・作業の効率化・水稲面積維持を図るため、水稲直播栽培や高密度播種移植栽培の導入による稲作園芸複合経営が増えてきている。

齊藤氏の耕地は、灰色低地土、泥炭土など複数の土壤型からなるため、排水性など土壤条件に応じて水稲、畑作物を作付けしてきた。また、直播栽培をすることで、園芸作物（ハウストマト）や畑作物（大豆）との作業競合を回避し適期作業による各作物の収量向上を図っており、近年は、高密度播種移植栽培を組み合わせる事によるさらなる稲作省力化を目指している。

4 稲作技術の特徴

乾田直播による水稲省力化により、春先の労働競合の軽減と育苗ハウス節減により、園芸作物の導入が容易になり、ハウストマト栽培を導入している。

北斗市で初めて乾田直播栽培に取組み、地域の新たな水稲栽培技術の先駆者であり、自分の経営だけでなく、道南での乾田直播導入による稲作栽培の安定（地域の水張り維持）に大きく貢献している。

(1) ほ場整備と透排水性改善

ア 均平施工を2年に1回行っており、管理しやすいほ場づくりに努めている。

漏水対策として、は種前に2回、は種後に2回ケンブリッジローラーをかけている。

また、畦塗りを実施している。

イ 田畑輪換で畑に戻す時は、心土破碎を行い透排水性の良いほ場作りに努めている。

表1 融雪促進、土づくり等

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
融雪促進または 土壌改良材 (kg/10a)	資材名		ケイカル	なし	なし
	施用量		60kg		
透排水性改善					
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	%	%	%
		搬出	%	%	%
	当年産	秋鋤込	100%	100%	100%
堆厩肥施用量 (kg/10a)			kg	kg	kg

注)「稲わらの処理法」の欄の%は、直播面積に対する割合。

(2) 施肥量及び施肥法

ア 田畑輪換による復元田の窒素発現を利用して、直播栽培の収量向上に努めているとともに、ほ場ごとの条件に合わせた施肥管理を実施している。

イ 稲わらの秋鋤込みにより、地力維持に努めている。

ウ 3年に一度、ケイ酸資材を施用している。また、土壌診断結果に基づき、肥料銘柄を選定、施肥量の調整により、適正施肥や肥料コストの低減に努めている。

エ 稲の生育状況に合わせて、適期に適正量の追肥を行っている。

表2 施肥量及び施肥法

項目		年次			平成29年			平成30年			令和元年		
		N	P	K	N	P	K	N	P	K			
基肥 (kg/10a)	全層	10.2	5.0	4.0	10.2	5.0	4.0	10.2	5.0	4.0			
	側条												
追肥 (kg/10a)	1回目	2.0			2.0			2.7					
	2回目							2.1					
(備考) 肥料銘柄：全層施肥 Dd708 3年間倒伏無し													

(3) 出芽促進技術

- ア 種子消毒は、種子温湯消毒済みの種子を使っている。
- イ 苗立本数確保のために、は種量を13kg/10a程度としている。
- ウ 毎日のほ場観察により、稲の生育状況に合わせ、適切な水管理を行い、苗立ちの確保、水温・地温上昇に努めている。

表3 出芽促進技術（種子予措・落水期間等）、播種時期、播種量等

項目		年次	平成29年	平成30年	令和元年
種子予措	種子消毒剤		種子温湯消毒	種子温湯消毒	種子温湯消毒
	吸水温度・時間		なし	なし	なし
	催芽温度・時間		なし	なし	なし
	カルパー粉衣% (乾粃比)		なし	なし	なし
	その他				
播種時期			5月2日	5月2日	4月30日
播種量（乾粃換算重）			13.0kg/10a	13.0kg/10a	13.0kg/10a
(備考) R1 出芽期：5/19 走り水：5/14、本格入水5/24					

(4) 除草剤・生育調整剤等

出芽前の雑草茎葉散布剤と出芽後の茎葉散布剤との体系除草を行っている。

表4 除草剤・生育調整剤

除草剤名等	処理時期	効果	残草程度・種類等
①ラウンドアップマックスロード	5/18	大	少
②クリンチャーバスME	6/5	大	微

(5) 病虫害防除

ア 病虫害の発生を見落とさないように毎日ほ場の観察を欠かさず、発生を確認した場合は、すぐに対処できるようにしている。

また、日々の観察に加え普及センターや農協の予察情報をもとに日程を決め、適期防除に努めている。

イ 田畑輪換により、病虫害の多発生を防いでいる。

(6) 直播栽培に当たって創意工夫ある取り組み等

ア 大豆との田畑輪換（2年置き）を行い、輪作体系をとるとともに病虫害の多発や収量低下が軽減されている。

イ 地域での機械共同利用を呼びかけ、V溝は種機、均平機、ケンブリッジローラーを3戸で共同利用し、コスト低減を図っている。また、各農家の機械経費の削減を推進している。

また、機械修理については自ら実施することで、修理コストを削減するよう努めている。

ウ 令和元年から新品種「えみまる」の試験栽培を行っており、早生品種導入による、熟

期の分散や他作物との労働競合回避を図っている。

エ JA新はこだて では「直播ななつぼし」をブランド米として販売しており、タンパク値による仕分けが徹底され、低タンパク米生産への意欲は非常に高く、毎年ななつぼし低タンパク米（タンパク6.8%以下）を出荷しており、販売面でのメリットも感じている。

表5 産米出荷成績

項目	年次	平成29年	平成30年	令和元年	3ヵ年の合計
総出荷数量 ①		270俵	286俵	298俵	854俵
製品出荷数量 ②		270俵	286俵	298俵	854俵
一等米数量 ③		270俵	286俵	298俵	854俵
一等米比率 ③ / ②		100%	100%	100%	100%

注) 俵数は60kgに換算のこと。

①の数量は直播栽培面積からのすべての出荷数量（規格外・加工用米等を含む）を記入し、

②③の数量は、加工用米及び規格外米、新規需要米・政府備蓄米を除く出荷数量、一等米数量とする。

表6 令和元年の坪刈調査区の成績（精玄米重は玄米粒厚1.9mm以上）

栽培品種名	ななつぼし	えみまる
苗立数（本/m ² ）	359	333
粗玄米重（kg/10a）	487	594
精玄米重（kg/10a）	451	556

（執筆者：渡島農業改良普及センター本所 専門普及指導員 平松 真由美）